彼女のシナリオ

曹達水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女のシナリオ

【Ｎコード】
Ｎ３２００Ｔ

【作者名】
曹達水

【あらすじ】
放課後の階段。
クラスメートに呼びとめられた。
彼女の名前は藤堂千鶴子。
背が低いがいは普通。のはず・・・。

1

「これ、受取って。」

目の前に差し出された紙でできた手提げ袋。

オレは訳がわからず、手をだしてしまった。
オレの手にしっかりとその物体を押し付けて、彼女はにっこり微笑むとそのまま階段をおりていった。

なんだろうと思って中を覗くと、金色のリボンが目に入る。
透明なラッピングにつつまれているのはカップのようだ。
たぶんこれは・・・・と思わないわけでもないが、今日は先を急ぐ。
もう帰るつもりで階段を下りようとした、その時声をかけられたのだ。

家に帰ってから見よう。

気をとりなおして、あわてて階段をかけおりた。

自転車を飛ばして家まで３０分。
カバンを置くと、制服を着替えるのももどかしく、まずはテレビのスイッチをいれる。
以前、見逃してしまったドラマの再放送がはじまるのに、ぎりぎり間に合った。
録画の予約を入れ忘れたのだ。
オープニング曲を聴きながら着替え終わると、そのまま画面にみいった。

オレの趣味ともいえるドラマ視聴。
連ドラは必ず見たい。
でも、体はひとつ、目はふたつだ。
いつも、リアルタイムで見るものと、録画、そして、ＤＶＤや再放送まで、ほんとうに毎日忙しい。
しかも、今そうであるように４月は再放送が多い。
過去のものからちょっと前のものまで。
必然的に放課後は速攻で帰宅だ。

最初から最後まできちんと視聴できたことに満足し、今日の連ドラ視聴メモをつけようと机に向かった。
筆箱を取り出そうと思ってカバンを見たとき、ついさっき、クラスの女子からもらった手提げの紙袋に目がいった。

中身を取り出してみると、やはり、カップだ。

しかも、なぜだかスヌーピー・・・。しかも・・・赤。赤はあまり好きではない。
スヌーピーも、女の子じゃないんだから、勘弁して欲しい。
これは使えないな。
とラッピングも解かずに放置。

他に、封筒が一通入っていた。

2

封筒が一通入っていた。
飾り気のない、ミントグリーンの封筒。
取り出した便箋も同色で絵がひとつもないシンプルなもの。

☆　★　☆　★　☆　★　☆

2年前のクリスマスの少し前、夢をみました。
友達に誘われて、駅ビルの中にあるファンシーショップへ行く。
彼女は片思い中の男の子にプレゼントを買うんだと、財布や、文房具などを物色中。

「いつももっていられるお財布と、受験勉強がんばれるようにって、文房具、どっちがいいかな。」

そんなことを聞きながらも、プレゼントを選ぶ目が真剣で、買い物に付き合わされた私はほったらかし。

何気なく近づいたカップの陳列してある棚。
目の前にある、水色のカップに手を伸ばそうとしたのに、私の手は赤いカップをもってしまう。
いつの間にか隣に来ていた男の子。彼は私が欲しかった水色のカップを手にしている。

私たちはお互いのカップを見たあと、何も言わずレジへ向かう。
レジには店員さんが二人。
プレゼントがたくさん売れるかき入れ時。
何も言わず、ラッピングをしてくれる。
それを待つ間、渡されたメッセージカード。
何を書こうか戸惑っていたら、
「お互いの名前を書いたら？」
店員さんの一人が言った。
私は、ローマ字で、彼は漢字で、自分の名前を書いた。
それを受取った店員さんは、出来上がったラッピングを見せるように少し上にあげ、私の方には彼の書いたカード、彼のほうには私の書いたカードを入れた。
そのまま受け取り、彼と私は
「じゃあ。」
「うん。」
とだけ言ってその場から別々に離れた。
私の手元には、彼の名前だけが書かれたカードのついた赤いマグカップ。
いつか、彼と交換できる気がして今も机の棚に飾っている。

☆　★　☆　★　☆　★　☆

何度見直しても、手紙にはそれだけしか書かれていない。
見た夢のないようなのだろうか。
オレにはそんなことは現実でも、夢でも起きたことがなかったはずだ。
好きとか、付きあいたいとかの告白の言葉もない。
ある意味、ラブレター、ある意味、勘違いだ。
この相手、オレじゃないだろう。厄介だ。
このプレゼント、返したほうがいいのかななどと思いながら封筒をひっくり返すとそこにようやく名前があった。

3

藤堂千鶴子

同じクラスだが、まだ、高校生活が始まって3日目だ。
名前なんか覚えられない。
そう、彼女はほんとうに普通だ。
特別かわいいわけでも、明るく元気とかでもない。
どちらかといえばおとなしいかも知れない。
よく、あんなところでプレゼントを渡せたと思うほどだ。
しかも、オレだ。
今まで母親いがいにカッコいいといわれたことも無ければ、鏡に見入ってしまった経験も無い。
だからこそ、毎朝、念入りにグルーミング、ヘアセットは欠かさない。

オレあてかどうか怪しくなってしまったラッピングを解くわけにいかず、好みにもまったくあわないプレゼントを前に頭を抱えるしかなさそうだ。

朝、席に着くと藤堂千鶴子がやってきた。

「おはよう。」

「おはよう。」

昨日、いきなりの告白めいたことをやっておいてあまりにも普通の展開だ。
挨拶のあと、黙ったままのオレに笑顔のまま聞いてきた。

「昨日、手紙読んでくれた？」

「うん、まあ。でも、あれ・・・。」

なんと言ったらいいかわからず、とりあえず家においてきてしまったプレゼントをやはり持ってきて返すべきだったと後悔していると、

「なに？」

聞き返されてしまった。

「あれさ、オレじゃないだろう？誰かと間違えた？それとも誰かに渡して欲しいとか？」

彼女は少し困ったように笑いながら

「うん、あれね、ほんとうに夢で見たことがあるの。その後、駅ビルに行ったら夢で見たのと同じようなカップが置いてあるじゃない？思わず買っちゃった。あの夢、ほんとうにおこったらいいなってどきどきしながら。」

「そう・・・なんだ。でも、あれ、やっぱりオレじゃないよ。そういう夢、みたことないし。」

「うん。でも、あれ、新庄君だったらいいなって思ったんだ。」

そう言ってオレがなにか言い返すまもなく、藤堂千鶴子は最後に笑いかけてから視界から消えた。

少しだけ顔が赤かったような気がしなくもない。
もしかして、今のって告白？
危うく、スヌーピーは少女趣味だとか赤は好きではないなどと言ってしまわなくてよかった。
勘違いだとしても、向こうがオレを好きなのかもと思うのは悪くはない。
さりげなく左を向くと、藤堂さんが友達となにか話しているのが気になった。

4

終業のベルが鳴り、通学カバンに手をかけて席を立とうと思い立ったとき、藤堂さんがオレの視界を横切った。
今日も早く帰って再放送の連ドラ視聴と行きたいのだが、その前に藤堂さんに確認しておかなければいけないことがある。
例のカップはやはり返したほうがいいような気がする。
カバンを手に席を立ち、藤堂さんの行き先に目を凝らすと、どうやらトイレのようだ。
仕方ない。廊下で待つとしよう。

「新庄君、もう帰るの？」

トイレから戻ってきた藤堂さんがハンカチで手をふきながら声をかけてきた。
手ぐらいふき終わってから出てくればいいのにと、心の中で余計なお世話の突っ込みを入れながらも、向こうから声をかけてくれて話しやすくなったとほっとした。

「あのさ、例のあれ、やっぱり返したほうがいいと思うんだ。だから明日もってくるよ。」

カップが好みに合わないとはさすがに言えない。
それに、あれをくれた気持ちをきちんと確認してみたいってのもなくはない。

「えっ、あれ、気に入らない？困ったな。」

「気に入らなくはない。っていうか、意味がわからない。だから明

日、もってくるから。」

できるだけ、傷つけないように優しく、明るくいったつもりだ。

「じゃあ、オレ、帰るから。」

言い捨てて、オレは家路を急ぐことにした。

下駄箱で靴を履き替えていると、藤堂さんが急ぎ足でやってきて追いつかれてしまった。

カバンを手にしている。

「そこまで一緒に帰ろう。」

「急いでるんだけど・・・。」

「誰かと約束でもあるの？」

「いや、趣味の連ドラ視聴があってあまり時間がないんだけど。」

「大丈夫。私、自転車こぐの早いから。新庄君、自転車通学だよね。」

「うん・・・。」

オレの返事を待たず、もう靴を履き替え、入り口で振り返りオレのことを急かしている。、

「早く行こう。」

仕方ない。

二人で並んで歩き始めると、意外と藤堂さんが小さいのにおどろいた。
頭のてっぺんが見える。
この人身長１５０センチあるのだろうか？

「あのね、昨日渡したカップ、嫌じゃなかったらそのまま受けとって欲しいの。手紙、見てくれたでしょう？ほんとうはあの夢、実際におきたらいいなって思ってたんだけど、それは無理かなって。」

「いいけど、あれ、名前わかるんじゃないの？カード交換してないか？」

「うん、夢の中ではね。でも、名前見えなかった。だから、新庄君でいいよね。」

嫌ともいえずうなずくしかなかった。

「まあ、いいけど。」

そういってしまったとたん、藤堂さんが目を輝かして勢い込んで言った。

「あのね、私、あれ、やってみたいの。」

「やってみたいって、なに？」

勢いに圧倒されながら聞き返したときには、自転車置き場に着いていた。
藤堂さんは自分の自転車を出すと、さっさとまたがり

「じゃあ、新庄君、あれもう一度読んでおいてね。できればおぼえてね。」

そういって手を振って帰っていった。

一緒に帰るって言っただろう。自転車こぐの早いからって。話が違う。

まあ、一緒に帰らなくてすんだのは正解だ。

藤堂さんの自転車のこぎ方はどう見てもヨロヨロと危なっかしくとても早いとは思えない。

しかも、帰る方向も正門を出たとたんオレのうちとは真逆だったのだから。

5

昼休みの屋上。

に、でるドアの前。

階段を上りきった踊り場とでもいおうか。

この学校では屋上にはかってにでられないように鍵がしっかり閉まっているようだ。

藤堂さんに呼び出されたのだが当の本人がまだだ。

「お昼ご飯食べ終わったら屋上に来て。待ってるね。」

確か、待っているはずだったのだが・・・。こんなことなら昼を抜けばよかった。

そうしたら、ここに来ないという選択も胸が痛くはなかった。

ほんの一瞬、告白かな。と、心が躍ってしまった自分を戒めながら待つこと3分。

「あれ？もう来てたんだあ。」

笑顔満開で藤堂千鶴子登場だ。

「で、なに？」

少し不機嫌さが声に出てしまったのは仕方がない。

そこを気にも留めず、彼女はオレの前をすり抜け、ドアに手をかけ、

「なんで？」

ドアをガチャガチャさせ、更に力いっぱい引っ張ったり押してみたり。
ほんとうに無駄な抵抗をやめようとしない。
「鍵、しまっているみたいだよ。」
「なんで？せっかく昼休みの屋上にしたのに。」
そういうとくるりと向きを変え、オレに熱く同意を求めた。
「昼休みに男子を呼び出すとしたら、定番は屋上でしょ。なんで開かないの。これって今日だけ？みんなどこで話すんだろう？」
「さあ・・・。」
ときどき彼女は面白い。
そして、オレも納得してしまいそうだ。
みんな、どこに呼び出すんだろう？オレが考え込んでいると、
「まあ、いいや。」
そういって、気持ちの切り替えも早く、藤堂さんが笑顔に戻った。
「で、なに？」
「昨日、おねがいしたよね？覚えてきてくれた？」
覚えるも何もあんな短いストーリー頭に入らないほうがおかしい。

「手紙の内容だよね。覚えてはいるよ。」

「そう。だったらあれ、あの後どうなると思う？」

どうね。わからないな。そう伝えると、

「あれね、私の中では恋の物語だと思ったんだけど。」

「ああ。」

「カップを取り違えたまま二人は分かれるのよね。夢はそこまでなんだけど、名前がわかるじゃない？だからきっと偶然の再会があるの。そして二人はお互いのカップを交換するのかな。それともそのままで付き合う。もちろんカップも取り違えたまま。こういうのどう？」

「悪くはない。ラブストーリーだとしたら偶然と奇跡の両方がある。」

「でしょう？」

「うん。」

うなずきながら、今までみたドラマの中に同じような話しがなかったか自分の頭に検索をかけた。
ありがちだが、ピッタリ同じものはないようだ。

「ドラマでは可能だけど、実際には難しいな。かなり偶然に頼っている話だ。」

「そうかな。不思議なことっていっぱいあっていいような気がするけどな。」

藤堂さんはそういうと屋上に続くドアに背を向けオレと同じようにドアにもたれかかった。

ほんのちょっとこっちを見上げるような角度で、しかも絶対オレの顔は視界に入ってないとわかる程度の動きしかないまま話し始めた。

6

藤堂さんが口を開く。

「あのストーリーの続き、新庄君ならどう思う？」

「藤堂さんの夢のだよね。」

「うん。」

「藤堂さんの言うとおりラブストーリーでいいと思う。せっかくだからその気になってやってくれそうな相手見つけたら？」

たぶんオレでは台無しだ。もっとかっこよく生まれてみたかった。

「うん。それはね。でさあ、こうやってカップを渡して、夢の話もして、屋上に呼び出したら、その後の展開はどうしたらいいかな。」

「ああ、その場合、告白でいいんじゃない？」

「どっち？」

「どっち？ああ、藤堂さんのほうだろう？あの手紙だと好きってのは伝わりづらい。だから呼び出したなら好きとか付き合ってとか言えばいいと思うけど。」

「うん。そうしたら相手はどうするの？」

彼女がこっちを見ているのを気にしながらも平静を保つ。

やっぱり告白ではなかったようだ。

「そうだな。先に手紙に好きって書いておくんだ。そうして呼び出してから、付き合って。で、これ、ハッピーエンドがいいんだよね？」

「もちろん。」

「だったら、返事は、うん。男のほうがそのままキスするってのはどう？」

言ってて照れなくはないがドラマならそこでエンディングでいいな。人の恋なんて適当でいい。

「うん。わかった。でも、手紙はもう渡しちゃったから。付き合って。」

あんまりさらりと言うから内容の確認だと思わなくはない。

でも、藤堂さんはオレを見ている。しかも顔が赤い。

「それ、オレしていいの？」

まるでドラマだ。とりあえずセリフとしては悪くないだろう。

「うん。」

うん、ね。防衛したほうがよさそうだ。何とか平静を装って声を絞り出す。

「遠慮しとく。」

声が不機嫌になったのも仕方が無い。
からかわれているのか、練習台にされたのか。
もてたことなんて無いオレの精一杯の見栄だ。

「残念。」

そういうと、藤堂さんはくるりと向きを変えて、今度はオレの顔を覗き込んできた。
いや、背の低い彼女が下から見上げるとそう見えるだけだ。
しかも笑顔で。

やはりからかわれてるのだろうか。わかりづらい。

オレが返答に困っているとじゃあね、と階段を駆け下りていってしまった。
もし次があったならそれなりのセリフを吐いてみようと思う。

彼女に階段に取り残されるのはこれで二度目だった。

7

たぶんオレは口説かれている。
ドラマなんかでは絶対そうだ。
でも、彼女が天然だとしたら、オレはこのまま引っ張られて勘違いしまくる脇役だ。
ここは慎重に考えたい。

彼女が口説いているとしよう。
今、オレには特に好きな子はいないし断る理由もない。
だが、あくまでたぶんなんだ。
まるで本気さが伝わらない。きちんとした告白も受けていない。
勝手に暴走して自爆は避けたい。
なんといっても高校一年の春だ。

藤堂千鶴子

彼女は普通にしか見えない。
学校指定のブレザーの制服。
白いブラウスもみんなと同じで、第一ボタンだけをはずしてある。
スカート丈もひざが少し見えるくらい。
クラスで目立つ女子たちはもっと短い。
高校生らしく、たぶんカラーなんてしていない髪も、肩につくくらい。
顔はもちろん普通。
体育の授業時などに男子だけで話す、学年のかわいい女子の中にも名前は無かった。
もちろんマイナーなほうにも。

とりたてて褒めちぎるところも、けなすべきところもなさそうだ。
強いて言えば背が低く、友達と並んでいるときはたいてい彼女のほうが小さい。
なにか個性をあげるとすれば、オレに気のあるそぶりをみせるところだけだ。

机の左側にラッピングを解かれないまま放置されているカップを見ながらため息がもれる。
いっそ今夜辺り、藤堂さんの見たというあの夢と、屋上でのシーンをあわせて夢にでも見れないだろうか。
そうしたら、明日の朝、藤堂さんに夢をみたんだとはなしてみれなくもないんだが。
立場が逆転したときの藤堂さんの反応も気になる。
夢が見れるように願をかけながら寝るとしよう。

ベッドの上にダイブするとオレは頭まで布団をかぶった。

8

定期テストまであと二週間。

オレの席は廊下側から二列目の前から二番目。
右ひじをついて右あごを上がり気味に乗せると藤堂さんの席が目に入る。
今は写しきれなかった黒板をいっしょうけんめいノートに写しているようだ。

屋上に出れなかったあの日から藤堂さんとは話していない。

あのカップの話はいったいどうなったのだろう。
誰かピッタリの相手が見つかったのだろうか。
その場合は運命の出会いってやつになるのかな。
心の中でひとりごちていると、いきなり藤堂さんがこっちをみた。
オレはあわてて目をそらしてしまったが、思いなおしてもう一度そっちをみる。
別に目が合ったってどうってことないとつよがってみせたかったのに、もうそこには顔がない。
どこに行ったんだろうと迂闊にも目でさがしてると、こっちへ歩いてきた。
机のすぐ横、オレの視界のど真ん中にだ。

「新庄君。」

と呼びかけられるまで、右の腕が折れそうなくらい曲げた上に真横にした顔をのせるという、とても不自然なかたちをとってしまった。

やっぱりという気持ちと、今か、という己の複雑な心理なんて無視して何とか声を絞り出す。

「なに？」

ついでに不自然なこの体勢も直しておこう。

「なにか機嫌悪い？それとも眠い？」

「なんで？」

「そう見えたから。」

そういって左のひじを曲げて自分の顔を斜めに乗せて見せた。

オレのさっきまでの体勢の真似をしていると見える。

ちょっとかわいい。

「いや、眠いかな。」

あせった気持ちを隠そうと、言葉を濁す。

さすがに座った状態では頭のてっぺんはみえないものだなと、気をとりなすためにどうでもいいことを考えたりした。

9

またまた屋上にでるドアの前。

階段の踊り場にいる。
案の定、鍵はかかっている。
待つこと一分。
今日は早かった。藤堂千鶴子登場だ。

「おまたせ。」

言葉とは裏腹に、その明るい声は待たせたことを気にしている様子はない。
ドアノブに手をかけ、ガチャガチャとお決まりのように音をさせたあと、こっちを向き直った。

「やっぱり今日も開かないか。そして、他のカップルもなしと。」

「呼び出す場所はここではなさそうだ。」

ため息混じりにかえす。
内心、今度こそ告白かなと、思ってしまうのをかくすために。

「この間の話の続きがしたくて。あれ、相手の男の子が私に告白するとしたらどうかな？」

「そのパターンを考えたいってこと？」

だとしたら、相手の男とどこで出会うかが重要だ。

ドラマなら・・・。
前回話したのとは全くちがう展開もありだろう。
バッドエンドはどうかな。

新しいシナリオに心奪われて長時間考えすぎたみたいだ。
藤堂さんの携帯が着信を知らせたのをきっかけに我にかえった。
メールを返す彼女の手を何の気なしにみていると、打ち終わったのか、こっちを見つめ返してきた。
下から見上げるまっすぐな目。

「新庄君、今付き合ってる人いないんだよね？」

なぜだろう。
さっきまでとは彼女の雰囲気が変わった気がする。

「うん。」

「じゃあ、気になってる子がいる？この学校ならあたし、協力するよ。」

見上げてくるまっすぐな目。
協力って、どういうことか。
頭の中で知らぬ間に構築された自信、藤堂千鶴子はオレに気がある、が崩れていく。

「特にいない。」

声が不機嫌になってしまったのは仕方が無い。

「ほんとうに？だったらなんであたしふられたの？好みじゃないってこと・・・。」

一気にまくしたて、、最後はしりつぼみじょうたいでうつむいてしまった。

ふったってなんだ？
よく思い出せ、オレ。
どう声をかけていいか迷っていると、彼女は勢いよく顔をあげて言い放った。
泣いてなんかいなかった。
落ち込んでもいなさそうだ。

「高校にいないなら中学のとき好きだった子いるよね？いないはなしね。あっ、仲のよかった子でもいい。なんでもいいからいるって言って。」

下から見上げるまっすぐな目。
そして、オレは押しに弱い。
今、気がついた。
彼女の気に入るように応えている。

「まあ、なかがよかったくらいなら。」

ほんとうは好きだった子というより、仲がよかった、よく話していた、せいぜい、気の合うクラスメートってやつだ。
話す内容はだいたいが、昨日のドラマ、なのだから。
高校は違ったし、まあ話しても問題ないだろう。

「やっぱり。その子のことを忘れられない、っでいいよね？それな

ら納得できるっ。」

勢いに押されて思わずうなずいてしまった。ほんとうはどうでもいいのに。

やっぱり押しには弱い。

「あたしね、あしたの放課後、新庄君にどうしても付き合って欲しいところある。いいよね。」

よくは無い。

見上げてくる目。

その頭の上に手をのせてグリグリ押し付けたいのをこらえる。

時間はとらせないだの、振ったんだからそれくらいしてくれてもだのとまくしたてられ、藤堂さんのペースで話が進んでいった。

その子の名前から通ってる高校名まで勢いに乗った藤堂さんは追随の手をゆるめず、いったいオレはいつ藤堂千鶴子を振ったんだろうと自問しながら、彼女の望みどおり答えさせられてしまった。

10

「ご飯よー。」

歌うような母親の声に呼ばれて、夕方の食卓についた。

テーブルの上には、ペンネのミートソース和え、キャベツとベーコンのスープ、カジキのフライ、付け合せにはレタスとゆで卵、ミニトマトは外さない。ちなみにゆで卵はお花型ってやつに切ってある。デザートはブドウだ。

中学で仲がよかったやつらによると、オレは母親に溺愛されているらしい。

そして彼女の愛情表現は料理ともうひとつ。

中学一年のときだった。

その日、学校から帰ると母親がダイニングテーブルのいつもの席に着いていた。

「直君、話があるの。」

そう前置きをして、オレにも椅子に腰掛けるよう勧めてきた。

オレが腰掛けたのを見て、気合をいれるときみたいに深く息を吸ったあとおもむろにはなしだした。

「直君、これ、見たことある？」

母親は両手の下に隠すように持っていた箱を取り出した。
オレの答えを待たず、箱の中身をだして見せた。

「これね、たぶん、ちゃんと見たこと無いと思うんだけど。知っておかなきゃあなたが困るのよ。」

そういってオレにひとつ手渡した。
パッケージから中身を出し、もしかして・・・？
そうおもって母親を見ると、大きくひとつうなずいて見せた後、使い方を説明し始めたのだ。

これはつまり、大人の男女が子供を作らずに、でも、そういうことしたいなーって時の必需品だ。
通称、水風船としておこう。

「いつか、好きな女の子とお付き合いする日がくる。だって、直君、とってもカッコいい。ママの自慢。気持ちがあればそういうこともあるかなって思う。直君、男の子だしね。念のためにきちんと話しておきたかったの。子供が子供を作るなんてことの無いようにね。あと、中学ではまだ使うのは早いとは思うわよ。でもね襲われるってことだって無いとはいえないの。きちんと知っておくべきだと思うわ。」

オレはかっこよくない。もてたことも一度も無い。
でも、母親の目にはそう映らないらしい。
大方、その時の流行の連ドラの影響だとは思う。
そこから、あの人は女性の生理についても説明しだした。

だからオレはもてないにもかかわらず、そっちの方は知識がある。

しかも母親からだからやらしいとかより、まるで勉強、でなきゃ世間話のようだった。
最後にその箱をオレに渡して、持ってなさいね。と笑顔で釘を刺してきた。

「机の一番上の引き出しにいれておきなさい。それと、ママ、時々中身のチェックするからね。」

使えないでしょう。絶対チェックはしているはずだ。場所だって動かせない。
そんな講義を受けた翌日、学校でクラスメートに話したら言われたんだ。

「おまえんちの母ちゃん、なに考えてんだよ。でも、見たい。今それ持ってないの？もってこい。な。」

おかげで次の日の放課後、クラスの男子に囲まれて水風船の使い方の講義をする羽目になった。
もちろん現物を見せながら。
ちなみに水風船というネーミングは、その時クラスで一番目立つ、女子人気の高い山下がつけたものだ。
それ以来オレは、男子の中では一目置かれてしまった。

欲しいとたいがいのやつはいったんだが母親のチェックを恐れ、けっきょく誰にもやらなかった。

机の一番上の引き出しにはそのときのまま手付かずの箱が入っている。
箱の向きがときどきちがうのはチェックした証拠だろう。

あの人はわかりやすい。

11

「だからね、ちょっと見てみるだけでいいの。みたら納得するから。」

藤堂さんがオレをつき合わせたのは、忘れられない？彼女、斉藤の通ってる高校、明星高校のすぐ近く。
残念なことにオレたちの高校から自転車で３０分ちょっとしかかからない。
中学がオレと一緒ってことはここが通学路だとにらんで、通りに面して広めの駐車場を持つこのコンビにの前で待ち伏せするらしい。
斉藤はさっぱりした性格で、万が一遭遇しても、まあ、オレは困らない。
それに、学校が終わってここにくるまでに３０分以上たっている。
もう帰った後かもしれないし、部活動にいそしんでいるのかもしれない。
ここをとおるかどうかすらわからないのだから。

録画予約は万全だったかなと、頭の中で確認したり、昨夜の中学の思い出をふりかえったり自分の世界に入りこんでいた。

「おそい。」

藤堂さんは気が短いらしい。
ここに来てからまだ5分から１０分といったところだろう。

「もう、帰っちゃったんじゃないかな。」

あきらめて、帰るといってくれることを祈りながらまた考えにふけ

る。
どうでもいいな。それより、母親にもう一度勝手に部屋に入るな宣言をしておかなければ・・・。
前方から一人の女子高生。
自転車でやってくるのを確認すると、藤堂さんはその前に躍り出て自転車を止めた。
背が小さいながら機敏な動きだ。
「すみませーん。あの、友達待ってるんですけど、明星高校のかたですよね？」
相手がうなずくのを確認すると、笑顔満開で話し出した。
「一年生の斉藤って子なんですけど。失礼ですけど、何年生ですか？」
「一年です。クラスにも斉藤佐緒里って子ならいるけど・・・」
「そう、その子。私、友達なの。中学一緒で。まだ教室に残ってるのかな？」
口からうまれたっていう形容詞はこの人のためにあるとしか思えない。
藤堂さんは、すらすらとうそをついた。
「うん、まだいたけど。たぶん、部活も入ってないしそろそろここ通るかも。わからないけど。」
親切な斉藤のクラスメートにお礼をいい、ニコニコと手をふって見

送る背に向かい、皮肉のひとつでも言ってやりたくなった。
「友達なら携帯のアドレスくらい知っててもいいんじゃない？」
「それもそうだね。」
あっさりと受け流されてしまった。
藤堂さんは結構したたかといおうかくわせもの、役者かもしれない。
　またまた待つこと１０分あまり。
コンビにの横にあるある自販機で飲み物を買って、オレにも渡してくれた。
ミルクティー。
とってもおいしそうに飲む彼女につられてペットボトルのキャップを開けると濃厚な香りがはなについた。
オレはミルクティーが嫌いだ。今、気がついた。
しかもホットだ。
季節は春というより初夏だろう。もうすぐ衣替えの季節だ。
口をつけるのをやめ、ふたを閉めなおす。母さんに持って帰ろう。
マザコンではない。だろう。
「飲まないの？」
「うん、これすきじゃないんだ。でも、ありがとう。家族にすきなのいるからもらっとく。」
「ふーん、私の好きなものと新庄君の好きなものは違うのか。今度は新庄君の好きなもの教えてね。」

自分の好きなものを否定されても気に止める風でもない。
コーラを2本買って、1本を藤堂さんに渡した。これで貸し借りなしだ。

「コーラ、ね。ありがとう。家に持ってかえって、氷をいれて飲もう。」

そういってカバンの中にしまった。

明星高校の制服がちらほら通り過ぎる中、見慣れた雰囲気をもった斉藤を発見した。
通り過ぎる制服より、オレの動向に注意を注いでいた藤堂さんにあっさりと見透かされた。

「あの子？」

「たぶんね。」

左手をほんの少し上げて合図を送ると、向こうも気がついたようで目を見開いた後、藤堂さんを見て、オレ、そして目の前で自転車を止めた。

「新庄君だよね。久しぶり。制服だとちょっと違う人みたいだよ。」

笑顔でオレに先に声をかけ、藤堂さんにも軽く笑顔を向けた。人懐っこい性格は健在だ。

「斉藤、相変わらず早口だな。」

オレの再会の言葉をさえぎり、役者、藤堂さんが口を挟む。

「こんにちは。私、藤堂千鶴子って言います。新庄君のクラスメートで、この間振られたばかり。今日は無理いって斉藤さんに会いに来たの。」

「私に？振られたってなに？」

斉藤が、最初は藤堂さん、次はオレをみながらあせっている。

「うん、そう。見るだけってうそついて。しかも泣き落とし。」

えへへって笑顔はきっとこういうのを言うんだろう。

振られたまで言うのかと、あっけにとられているオレと斉藤をしり目にまくし立てる。

役者、藤堂千鶴子ここにあり。

「中学のとき仲良かったんだよね？新庄君のことどう思う？斉藤さん、今好きな人とか付き合ってる人いるの？」

「特に今はいないけど。」

「ほんとう？」

なぜか声を弾ませた。

「私ね、斉藤さんと気が合うと思う。さっぱりした性格だよね？よく言われない？」

「うん。言われること多いかな。」

「やっぱり。ねえ、今度みんなで映画見に行かない？」

「映画？」

「うん、私と新庄君と、斉藤さん、後もう一人誘って。」

満面の笑みってやつで少し上目遣いに斉藤を覗き込みながら役者がとまらない。

「ああ。」

大きくうなずくと、なにかに気がついた、いや役者に引きずりこまれた斉藤がオレを少しみたあと、藤堂千鶴子と目配せをした。

「いいよ。でも、あと一人どうしようかな。」

「こっちで誘ってもいいけど、新しいクラスメートで誰か映画好きそうな人がいたら誘ってみるのもいいんじゃない？」

「う～ん。」

「誰かいるね？」

「まあね。」

女同士の意思の疎通があったみたいだ。

オレは藤堂さんを振った覚えはないとか、斉藤のことも特に恋愛感情はないとか、映画っていきなりなんでそうなるんだとかいいたいことはあったはずなのに何一つ口から出すタイミングをつかめないままで話がすすんでいた。

とりあえず携帯アドレス交換なんてのをオレも含め3人でしたり、
テレビで大々的に告知しているあの映画にしようなんて話で女子二
人が盛り上がりその日は帰路についた。

12

落合北里駅中央改札前。

１０時２５分集合。

役者、藤堂千鶴子からメールで知らされたところによると、遅刻のないように２５分集合にしたそうだ。
あれ以来、役者と斉藤は頻繁にメールで連絡を取り合い、お互いいろいろ相談なんてしているらしい。
昨日もオレの席までやってきて

「違う学校に友達ができたのも新庄君のおかげ、ほんとうにありがとう。」

なんてしれっと言う。
オレは斉藤の携帯に連絡ひとついれられない。
そんなことしたらたぶん藤堂さんに筒抜けにされるにきまっている。
オレに連絡をよこすのは藤堂さんと係りもきまっているようだ。

時間より5分早く待ち合わせ場所に着いたオレは約束人を一応探してみた。
斉藤の連れてくる相手、上北雄介は面識がないがみんなまだのようだ。
藤堂さんによると、斉藤の今現在気になる相手、たぶんかっこいいにきまっている　とまで言い切っていた、上北君との仲を絶対邪魔しないことをきつく言い渡されていた。
すぐ近くで、ただもさっと突っ立ている、改札のまん前、通行人の

邪魔としかいいようのないがっちりしたやつがこっちに突進してきたとき、オレは人の視点は様々だと再認識することになりそうだと悟った。
そして予想通り藤堂さんの　カッコいいにきまってる　やつがオレに話かけた。

「新庄君？」

「上北君？」

お互いきまづさを隠す照れ笑いのなか、右手をつかまれ握手している。

「よろしく。」

「こちらこそ。」

これがスポーツマンってやつか。と一人納得してしまうくらい友好的だ。
会ってすぐ握手。オレにはない思考だ。
しかも、勝手に秀才をイメージしていたものだから自分の中に出来上がっていたイメージとのギャップに戸惑いを隠せない。
たぶん向こうもそうだろう。
オレたちが友好的に携帯アドレスの交換なんてのをやっていると待ち合わせ時間少し前に斉藤も来た。
しかし、役者がまだだ。
時刻は１０時３０分。
遅刻のないように　が聞いてあきれる。
斉藤が携帯を取り出したその時、小走りに藤堂千鶴子登場だ。

「ごめ～ん。まった？みんな早い。」

笑顔ですか。しかも早いって。

「おそ～い。ちず、５分の遅刻。」

さすが斉藤。そこは、待ってないよ、でも、今来たところ、でもなくはっきりと言おう。

「ごめんね。でも、ピッタリだよね。」

「どこがだ。」

こらえきれなくなってオレも突っ込まずにはいられない。

「普通さ、こういうのって・・・、あっ、上北君だよね。はじめまして。藤堂千鶴子です。でさ、待ち合わせには間に合ったじゃやない。ねえ？」

さすが役者。

責めているオレと斉藤は無視して上北に同意を求める。

そのうえ、待ち合わせ時刻は１０時３０分。それに遅れないように集合を５分早めた。その結果、メールには１０時２５分集合とのせ、自分は待ち合わせ時刻には遅れていないと独自の理論を展開して見せたのだ。部活でハンドボール部だという上北君に投げ飛ばされてみて欲しい。

映画は前評判どおり、痛快でコメディでハートフルだった。４人が４人とも、面白かったね、そうだね、と席を立ち、このシーンが

と議論を飛ばす必要もなく、また続編でもあったらみんなで見に来たいね、と藤堂さんがコメントをしめた。

高校生のお約束、ファーストフードで昼食をとることにして，映画館から歩くこと3歩で移動完了。店内は映画館隣という立地からか、激しく混んでいた。

気候もよく、公園も近い、絶対テイクアウトで青空のしたで食べようなんて言い出す藤堂さんをオレと斉藤でなだめ、何とか店内に席を確保した。

「今日はそと日和だよ？もったいないよ、こんなにごみごみしたところで食べるなんて。」

いつまでもぶつぶつ言う藤堂さんに、心やさしい上北君が手を差し伸べる。

「あの公園、広くて気持ちいいんだよね。食べ終わったら、散歩しながら池の水鳥にえさでもあげに行く？」

「行った事あるの？」

「子供の頃、親と来たよ。今も水鳥くらいはいると思うけど。」

「行く。ねっ。さおり、新庄君いいよね。」

「ねえ上北君、今日の映画、さおりになんて誘われたの？」

水鳥にフライドポテトをちぎって投げ与えながら藤堂さんが聞いている。

えさはたぶん２０円で売っていた思う、という上北君の進言を、もし無かったらつまらない　絶対じゃないならこれをあげる　とわざわざバッグに忍ばせてきたフライドポテト。さめて、グニャリとしたのを手を油まみれにしながら楽しそうに投げている。

上北君はなんて答えたんだろう。
こっちからでは背中しか見えず、藤堂さんの、そうなんだ、とか、へえ、とかの相槌がかろうじて聞き取れるくらいだ。斉藤と上北君をくっつけるためには役者藤堂千鶴子はどうでるのか見てみたい。
それともその気はないのだろうか。
もっとも、今日上北君を誘うまでは、私のアドバイスがよかったからだ　と言ってはいたが。
女子二人はメールでは飽き足らず、通話でお互い相談、いや、悪巧みってやつをしていたらしい。

「友達の恋を応援するために一役買って。」

このセリフを藤堂さんから斉藤に進呈したそうだ。
そして斉藤が上北君に相談というかたちでこのセリフを言った。
上北君の返事は、「いいよ、わかった。」
まるで藤堂さんの用意していたとおりの答えだったらしく、その後の展開もおもわくどおりみたいだ。
そして今日に至る。らしい。

上北君の了承を得たとき、オレにも藤堂さんから電話があった。
自分の手柄はしっかりアピールする。

「向こうは私と新庄君をくっつけようと画策するの。だから私と仲良くしすぎないでね」。

とは、ずいぶんな言われ方のようなきもする。
いつオレが藤堂さんと仲良くしすぎたんだろう。
斉藤も、藤堂さんからもらった油まみれのフライドポテトを楽しそうに投げている。
手が汚れることなんて気にもしないんだな、この二人は。

「鳥って何でも食べるんだな。」

「そうだね。」

斉藤は持っていたフライドポテトを全部池に投げ終わると　面白かった　と言って藤堂さんのほうにいってしまった。
二人が手を洗ってハンカチというより小さなタオルみたいので手をふいているのをボーッと見ていた。

「さっきの映画なんだけど、うちの高校の七不思議に似てるのがあったんだよ。」

上北君が話し出した。

「七不思議ってなあに？」

「いや、ほんとうは七つもないみたいなんだけど、通称不思議なことはそういう風にいうよね。斉藤きいてない？」

知らないという斉藤も含め、今日始めてみんなが興味を持って会話が進みそうだったのでオレたちは手近なベンチに座ることにした。
四人がけのベンチに高校生が四人座るのは窮屈だ。よって、少し距

離が開くが、たてに並んだ二つのベンチに二人づつ座った。話がよく通るようにと声の大きな上北君と絶対黙っていられない女子二人が端をとるため、上北、オレでひとつのベンチ、藤堂、斉藤でもうひとつのベンチと味気ない配置になった。

13

その夜というより夕方。

あれからあまり会話も弾まず、ゲームセンターに行ってみたりした
あと４時過ぎには解散となった。

高校生は金が無い。

家について手を洗い、部屋に腰を落ち着けるまもなく携帯が鳴った。

＞今日のこと。
普通、ああいうのは遅れていくの。
私と新庄君が遅れていったら、さおりと上北君で話せるじゃない。
＜

役者、藤堂千鶴子からのメールだ。

今日は楽しかったね。とか遅れてごめん。とかもっと普通の文章が
ほしい。
要するに今日のダメだしをわざわざメールしてきたってわけか。

＞先に教えておいてください。＜

とだけ他人行儀に返信しておく。
ほかの二人にはきちんと礼を尽くして

＞楽しかった、また＜。

ぐらいの内容でいいだろう。

返信してすぐにまたメールだ。司令塔がご立腹のようだ。

＞ベンチに座るとき、なんで、男子二人で座るかな。わざと？
じゃなかったら、気が利かない。
これからははじめにしっかり打ち合わせしようね。
佐緒里の恋、ちゃんと実らせるんだから！！！＜

オレは気が利かないと思われているようだ。
だったら返信もしない。気が利かないんだ。電源を切ってやった。

「直君、電話―。」

ご機嫌な母親の声に呼ばれてリビングへ行くと、わざわざ受話器を手渡された。

「誰から？」

オレの問いを無視してキッチンに引っ込んだ。

「もしもし？」

「あっ、新庄君？藤堂です。藤堂千鶴子。」

なぜ？電話？しかも名前を二回も言うんだ。
キッチンの方に視線をやる。あの人が聞き耳を立ててないわけが無

い。
携帯の電源を切った自分を責めた。
「この電話番号、さおりに教えてもらってあったんだあ。」
「それ、個人情報。」
やっぱりこの人と話すときは不機嫌な声しか出せない。
「携帯にかけたんだけどつながらなかったから。今日の反省会と作戦会議。今、大丈夫だよね。」
言い切るんですね。オレは押しにはとても弱い。
しかもうちのあの人が聞き耳を立てている以上、下手なことはいえない。
「携帯、つなぐからそっちにして。」
「じゃあ、新庄君からかけてね。まってる。」
言うが早いが切れた。ツーツーという音が耳に痛い。
電話なんてかかってこなかったことにして、このまましらばっくれたかったが、また家にかかってきても面倒だ。
携帯の電源を入れると、アドレスを検索する必要も無く、着信履歴が残っていた。
藤堂千鶴子
そのままかける。

ワンコールも無いくらいの速さででた。

「もしもし。」

声が弾んでいるのは気のせいでしょうか。あまり長時間の通話は困るんですけど。

「もしもーし、新庄君？聞こえてる？」

「聞こえてる。」

「よし、これで電話は同じ一対一と。」

「なに、それ？」

「私だけがかけたなんてつまらないじゃない。新庄君からも電話が来て初めて対だよね。」

なんですか。それ。

「じゃあ、そういうことだから。」

オレは携帯をもったまま固まった。

14

「ご飯よー。」

歌うような母親の声に呼ばれて食卓に着いた。
今日はハミングまでしている。

テーブルの上には、グリンピースご飯、豚汁、肉じゃが、さわらのホイル包み焼き、ちなみにさわらのうえの人参はハートと星型だ。
真ん中がそのかたちにくりぬいてある人参は母親のところにのっかている。うちの肉じゃがは肉が豚ばらを1センチの厚さに切ったのがゴロゴロ入っている。その上デザートはレアチーズケーキのようだ。

さっきの電話の話を聞かれたくなくて、いっしょうけんめい食べた。
母親の視線が痛い。
デザートになったころ、お茶を入れなおして母親がもう一度目の前に座った。

「これね、ブルーベリー入れてみたの。かわいいし、目にもいいのよ。それに、チーズケーキだと思うでしょ？ほんとうは半分ヨーグルトケーキなの。クリームチーズを減らしてヨーグルトで代用したの。カロリーオフでお財布にも目にも優しい。今日のは上出来。これでうちにも女の子がいたらなあ。」

ドキッとした。年甲斐も無く、少女のようにテーブルにひじをつき、あごを乗せてオレを見ている。
絶対さっきの電話の話をしたいんだ。話題をそらすんだ。

「これ、おいしいよ。」

「でしょ？ところでさっきの娘、礼儀正しくていい子ね。同じクラスなんでしょ。今日ももしかして一緒だった？」

聞きますか。そうですよね。

「うん、まあ。中学のときの同級生と友達だったらしくて。みんなであったんだ。」

藤堂さんが自分で言ったはずだ。斉藤と友達だと。

オレは聞いたことをそのまま伝えただけだ。心なんて痛くない。とっても小さいことは今度いおう。

「そうなの？デートかと思ってママどきどきしてたのに。そのうち家にも遊びにきたりするかしら？レアチーズケーキ好きかな。たのしみだわ。」

デート、それはオレも思わなくはなかった。でも、なにか違う。たぶんデートではない。

母さんがうっとり夢をみだした隙に席をたった。

「ごちそうさま。今日、見たいドラマあるから声かけないで。」

一応釘を刺すのも忘れない。

部屋に戻って携帯メールをチェックする。

藤堂さんから　あとはメールいれておくからちゃんと見るようにときつく言い渡されている。

そうしないと、もう一度、家の電話鳴らすからね　と脅迫されたのだ。

＞この先の４人での行動について
必ず、新庄君と私は５分遅れで行くこと（二人っきりの時間を自然に演出）
席は、さおりと上北君が話しやすいように座ること
新庄君からはさおりに話しかけること（恋心をあおるため）
私からは新庄君に話しかけること（恋愛モードに持っていくため）
以上。他になにか考えておいてね。＜

絵文字が一切無い。
たぶん、怒っているわけではないだろう。
返信も要らなさそうだ。まだ、何も案が浮かばないのだから。

とっても小さい藤堂さん。
でも、態度といおうか、気持ちといおうか、なんだか尊大な感じでどうしてもしたがってしまいそうだ。
小さいから嫌味じゃないのか。
だとしたら背が小さいって言うのは案外得なこともあるのかもしれないな。

せっかくつけたドラマを無視してメールを見ていたことに気づいた。
危なかった。見逃すと連ドラ視聴メモに穴があく。オレの唯一の趣味だ。メールはもう忘れよう。でも、絶対に電源は切れないように気をつけなければ。

ふと、ベッドの下に気がいった。

うちの母親はまるで掃除おんちだ。
片付けが苦手らしく、何でも斜めに配置したがる。
そんな性格だから、オレの部屋の掃除もいい加減だ。ざっと掃除機をかけるくらい。
とうぜん、ベッドの下はほこりがたまっている。それを確認してオレは安心するわけだが・・・。
念のために今、みておいたほうがよさそうだ。うん、ほこりだらけだ。自分でティッシュを持ってきてざっとホコリを払う。そのついでにそこにあった数冊の雑誌をきちんとそろえておく。母さんのチェックはなさそうだ。
その中の一冊。一番上においてある雑誌。
これは母親がわざわざ買ってきたものだ。

あれも中学のときだった。
その日は休日で、家でマンガを読んでいた。
出かけていた母親が、戻ってきてすぐオレを呼んだ。

「直君、これ。」

差し出された一冊の雑誌。
もちろん、雑誌の名前は知ってはいた。中身も学校に持ってきたやつがいてみたこともあった。でも、それを母親に差し出されるとは思わない。しかも笑顔で。

「ママ、買ってきちゃった。工藤さんちのお兄ちゃん、ほら、覚えてる？高校2年の。隆正君、こういうの読んでるんですって。男の子はみんなそうなのよって、工藤さん言ってたわ。買い物行く前に聞いたから、そのまま買ってきちゃったの。はい、直君に。」

手渡された雑誌。
マンガや記事ももちろんある。でも、俗に言うグラビアってやつが多い。しかも今月号は夏を前にその特集だ。
思わずぱらぱらとめくっていた手をバタンととじた。

「いがいと高かったのよ。大事にしてね。」

やっぱり笑顔ですか。せめてリビングに呼び出さずに部屋に持ってきてくれませんか。これ、持って部屋には入りづらいんですけど。

とうぜん、学校で話してみたら　持って来い！！！の嵐。それを見越してもちろんその日に持っていってはあった。
とうぜんクラスメートは感謝と感想を忘れない。

「お前のかあちゃん、やっぱかわってるよなー。」
だけでは飽き足らず
「変な愛に目覚めんなよー。」
までついた。

15

屋上に出る手前。

今日も鍵がかかっているらしい。

階段をあがるとそこにはもう藤堂さんがいて、オレに向かってドアが開かないとジェスチャーをして見せた。

学食で昼食を食べているとき彼女からメールがきた。

＞あそこでまってるね。＜

それだけだ。

友達と一緒だったこともあって、今日はオレのほうが来るのが遅くなった。

けっして、いや、わざとだ。たまには待たせてみたかった。

この間のメールのことを話そう、意味わかった？と問う彼女に、気になっていた箇所を指摘する。

「藤堂さんからオレに話しかけるってあれ、変えたほうがいいと思うけど。」

この間メールでもらった　私からは新庄君に話しかけること　ってやつだ。

「なんで？」

「

藤堂さんが会話をひっぱて、そうだな、上北の気持ちを上手に斉藤

に向けさせればいとおもう。」

「ばかね。それじゃあ、場合によっては私と上北君が仲良くなっちゃうじゃない。あの日だって、上北君、私にもとってもやさしかったでしょ。」

そういえば、まあそうかもしれない。ドラマだって脇役の予定の主役ってありだ。

あの日オレは少しつまらなかった。藤堂さんは、あまりオレを見なかった。話しかけるのも上北に対してが多かった。べつにたいしたことではないが、藤堂さんにまっすぐ、下から見られるのは嫌いじゃない。あの日はなかったな・・・。

「どうかした？」

現実に引き戻される。

「上北に聞いてただろう？あれ、返事なんだった？」

「返事・・・？」

「斉藤になんて誘われたのかって。」

「ああ、あれね。私の恋を応援するって。」

「それだけ？」

「うん。要約するとそんなかんじかな。」

絶対もっと長かった。でも、たぶん、意味はそういうとこだろう。

藤堂さんがオレの顔をのぞきこんできた。

「新庄君、次に会うときは二人をくっつけちゃわない？」

あれから斉藤と上北は付き合っている。
オレと藤堂さんで作ったシナリオはきちんと実行されることもなく、上北からの告白だったそうだ。確かハンドボール部は男女交際禁止だといってなかっただろうか。まあ、そういうのは表向きだけだろう。

今日も藤堂さんと二人、屋上に出る手前の階段の踊り場で話している。

斉藤と上北になにか進展があったときにのみここに呼び出されるわけだ。
この間、とうとう二人でデートして手をつないだと報告があったそうだ。

オレは今をもって物心ついてから女子と手をつないだことがない。

「新庄君って潔癖症ってほんとう？」

初耳だ。でも、思い当たるふしはある。

「いつも手をあらってるよね？」

朝、登校してきた後、体育のあと、昼食の前と後、汗をかいたとき、

誰のものかわからないものを持った後・・・。さりげなくしていたはずだったんだが・・・きづかれてる???
「
体育のあとなんかは顔を洗うついでのふりをして、他はなんとなく手になにかついたふりや、トイレに行ってみたり・・・。違う?」

「それがなに?」

「私ね、同じクラスになってすぐ気がついてた。でも、新庄君のは潔癖症っていうより、人よりちょっときれい好きなくらいかな。」

そういって笑って見せた。

潔癖症ってほどじゃないはずだ。でも、藤堂さんの手がきれいかどうかも気になることは認めよう。

「きれい好きはいいことです。」

そういって藤堂さんは手を振って階段を下りていった。

藤堂千鶴子からメールがきた。
>>究極の選択
潔癖症で手もつなげない男の子と
毛むくじゃらで汗臭い男の子
どっちがいい?

私の答え

毛むくじゃらで汗臭いほう
手ぐらいつなぎたいじゃない？<<

16

あのメールはたぶん・・・・。

「もしもし。」

「もしもし、藤堂？」

「うん。」

「あのさ、あのときの手紙の話し、やってみたいんだけど。」

少しの沈黙。

「いいの？じゃないな、うん。」

「明日、カップ売り場に何時に来れる？」

「じゃあ、午後二時５分。」

「わかった。」

駅ビルの中のカップ売り場。

時計は午後二時。約束より五分早い。

彼女がもうカップ売り場に来ている。

絶対遅刻するというオレの読みをしっかり裏切ってくれた。
隣にならぶ。
ほんの少しこっちを確認できるかどうかぐらい視線を動かした後、
赤いカップを手に取った。
オレも迷わず水色のカップを手に取る。
お互いのカップを見た後、当たり前のように二人でレジに並ぶ。
言葉は交わさない。
ラッピングを待つ間、メッセージカードを書く。
お互い自分の名前。
店員さんにお互いの手がクロスするように差し出す。
ちょっと困ったように彼女の目をみて、ジェスチャーで確認したみたいだ。
彼女のほうにはオレの名前のカード、オレのほうには彼女の名前のカードを入れてそのまま渡してくれた。

「じゃあ。」

「うん。」

それだけ言ってオレたちは別々に歩き出した。

次の日、オレは少しだけ期待した。
彼女がもう一度これ受け取ってと、紙の手提げを差し出すのじゃないかと。
手紙だけでもと思ったが何も無かった。念のため放課後までまったのに一言も声をかけては来なかった。仕方がない。

「藤堂さん、あそこで話したいんだけど。」

オレのほうから声をかけた。

「あそこって、やっぱりあそこだよね。定番の？」

「うん。先に行ってる。」

カバンをもって先に階段を上がる。
呼び出すのは緊張する。
やはり鍵はかかっている。奇跡は起きないものだ。
カバンの中から手紙を取り出した。
足音とともに藤堂千鶴子登場だ。
手にはやっぱり通学カバン。

「お待たせ。やっぱり定番はここだよね。しかも今日も鍵はかかってるのか。」

満面の笑み。呼び出されるほうはのんきなものだ。

手に持っていた手紙を彼女に差し出すと、折りたたまれただけのルーズリーフにしか見えないそれを読み始めた。

「これって、昨日の出来事だよね？私が書いた手紙と似てる。」

声を弾ませ、うれしそうにオレを見た。

「ありがとう。」

「どういたしまして。気に入った？」

「うん。でも、足りないな。」

役者が不満を漏らす。

「なに？カップの交換？」

「まあね、それもある。でも、手紙には確か好きって書くんじゃなかったの？」

「さすがに・・・そっちのも書いてなかったよ。」

「そうだけど。でもこれ、新庄君のストーリーになったんじゃない？私、もうそのつもりでここにきたんだけど。」

「好きも付き合っても無い。」

そういうオレに

「うん。」

うなずいて目をとじてみせた。

「うん、って。」

戸惑うオレに目を開けた役者が一言、

「偶然も奇蹟ももう起きたの。後は必然。それは新庄君が起こすのよね？」

そういって思い切りオレの顔を覗き込んできた。

この恋愛ドラマのシナリオはもう書いてなくはない。

「オレのシナリオでは女のほうから告白だ。」

いきまいて体勢を立て直すと

「付き合って。」

こともなげに言って見せた。役者藤堂千鶴子ここにありだろう。

「好きがない。」

指摘を入れてやる。

「それは手紙のはずでしょ。今回手紙を持ってきたのはそっち。ほんとうなら新庄君の手落ち。しかも付き合ってもそっちのセリフになるんじゃない？ということは、新庄君に残されたアクションはあとひとつ。」

下から見上げるまっすぐな目。せめて目をとじてほしい。

「さあ、どうするのかな。」

追い詰められて、もうどうでもよくなりそうだ。役者では彼女にはかなわない。しかし、シナリオはきちんととうそうと思う。

「すき、付き合って。」

棒読みのセリフを言い終わったオレに残されたのは彼女からのキスを受けるのみ。

「うん。」

とかわいくうなずいた役者はそこから一歩も動かない。

「オレのシナリオ、気に入らないの？」

「うん。ここからは新しく作って。」

そういってオレの右手を両手で持った。

けっきょく、彼女のシナリオどおりにしか受け入れてはもらえないようだ。だが、この手を目の前で洗ったらどんな反応するのか試してみたい。今度はそれをシナリオに追加してみよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3200t/

彼女のシナリオ

2011年7月24日18時38分発行